

臨床免疫学の進歩

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
内分泌・代謝内科学

中 村 直 登

現在の医療行為の中で、免疫に関連したものは、無数にあるが、今回の特集では最近発展している分野に焦点をあてて、免疫学的治療を特集した。基礎医学の発展が、臨床の現場にフィードバックされるまでには、時間がかかるのが当然であるが、免疫学的治療もその例外ではなかった。T細胞の役割分担が証明され、そのシグナルとしてのサイトカインが注目されたのは遠い昔のことである。サイトカインハンターなる人々が、ほぼ手当たり次第に種々のサイトカインを発見、クローニングし、役割は後から究明するという方法が当たり前であり、また、細胞表面抗原を分類するCD分類でも同様であった。混乱と収束を繰り返し、少しずつコンセンサスができ、最近はかなり信頼性の高い論理構成となってきた感じであるが、まだまだ免疫システムの解明には時間がかかると思われる。

臨床の現場においては、ステロイド剤を中心とした治療が中心であったので、ステロイド剤特有の副作用が常に問題となってきた。自己免疫疾患では長期の治療となるため副作用は次第に深刻となる場合が多く、臨床的には重大な問題であった。免疫抑制剤においてもIL-2メッセージ阻害薬が多く使用されたが、効果が不十分であり、ステロイド剤を併用することが多かった。

最近登場した抗体治療は、これらの点を克服し、効果も充分であり、これまでの治療法に比較して優れた点が多いが、欠点がないわけではない。免疫学的生体反応の基礎となるTNF- α やIL-6などの作用を、抗体で中和することは、免疫反応の基礎的部分を大きく抑制することになり、感染症に対する防御反応が低下することに

なる。しかし、その臨床効果は既存薬との比較の範囲を超えて優れたものがあり、副作用に充分注意すれば、現在の治療の概念を著しく改善するものである。これらの抗体治療に際して、注意すべきことが2つあると考える。1つは治療法に習熟した医師の育成であり、2つ目は新しい治療法の社会への周知である。発症早期こそ、これらの治療法が最も効果を発揮する病期であることを社会に周知し、できるだけ早期から医療が介入し、可能な限り社会活動ができる状態で疾病の進行を抑止することが肝要である。

抗体治療の登場で、確かに治療は進歩したが、まだまだ安全な治療ではない。免疫疾患を安全に治療するには、抗原特異的な治療でなくてはならない。しかし、多くの免疫疾患で特異的抗体が発見はされているが、その抗原が疾病の原因になっているかは不明である。多くの自己免疫疾患の病因がはっきりしなくては、抗原特異的治療は不可能である。もし、疾病の原因となる抗原が特定されれば、その抗原に対してのみの免疫寛容を惹起すればよいことになる。

抗原特異的免疫寛容は免疫治療に関わるすべてのひとの夢であるが、動物実験では一部成功しつつある。まだまだ乗り越えるべきハードルは高いが、全く先が見えないわけではない。抗原特異的免疫反応をコントロールできれば、移植治療が非常に容易となり、ドナー探しも容易となる。

免疫現象の全体をコントロールすることが比較的容易となった現在、我々の目標はいかにして抗原特異的免疫反応をコントロールするかに移行すべきであり、それは不可能ではないと信じている。